

私がこの社会でやってきたこと クニージニク(本屋)として働いてきた

村野克明 (連続講演会講師：昭和 51 年度卒)

外国語学部ロシア語学科を卒業後、早稲田大学大学院に進学しましたが、修士在籍中、札大の先生から「ナウカ (株) での求人募集」の連絡を受け、採用試験にパスして入社しました。同本社で仕入部外国新聞雑誌係、営業部 (都内の大学へ直販)、ロシア部 (仕入・宣伝) と歴任し、2006年7月の倒産後は今日まで新会社の「ナウカ・ジャパン」に勤務し、ロシア書月刊カタログ (<Литера>) のために新刊本の書名の和訳作業などに携わってきました。



最初の「ナウカ (株)」には1979年秋の入社から四半世紀ほど勤めましたが、ここは組合活動が活発で、同じ洋書業界の組合と組んで団体交渉をやったり、上部団体の出版労連 (日本出版労働組合連合会) のイベントや行動に参加したりしました。その後の「ナウカ・ジャパン」では、余暇をかなり翻訳作業に費やすことになりました。その過程で知り合った編集者の方々からはずいぶんと教わりました。

近年は、札大の先輩とその高校時代の友人とが牽引するブログ (掲示板) 「談話室＝水源地」と、札大図書館・国会図書館に勤務した福島みゆき氏の個人雑誌「名田島お茶の間通信 せせらぎ」と、Web版「水源地」誌とへの書き込みや寄稿に、専念してきました。

また、「出版ニュース」誌上旬号の「海外出版レポート ロシア」欄への寄稿も、常連寄稿者が都合つかない場合には、その「代役」として執筆してきました。

ロシア語の<книжник> (クニージニク) という語は、手元にある研究社や小学館の露和辞典をみると、①愛書家；(皮肉) 実生活を知らぬ本の虫、②書籍販売業者；書店員、③書籍出版業者、とありますが、私の場合はこのどれにも該当する、と言えそうです。③も該当するというのは、私の母の文章と聞き書きを含めた「文集」を編集して発行したからです。この「文集」には「朝日新聞」のインタビューに母が答えた戦時中の出来事の記事のコピーも収録しており、非売品ですが国会図書館でも受け入れて頂きました。

翻訳の仕事については、私の場合、この①②③の延長線上にある、とも言えます。

ということで、11月7日の「講演」は、「クニージニクとしての私」から「翻訳者としての私」へと話を展開することにもなりそうです。

【編集】

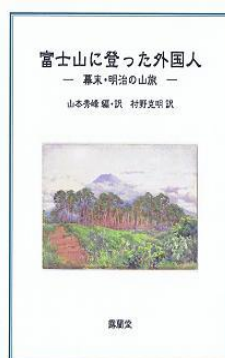
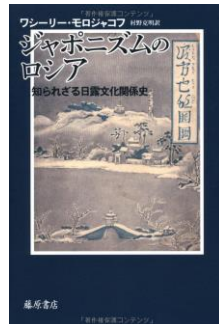
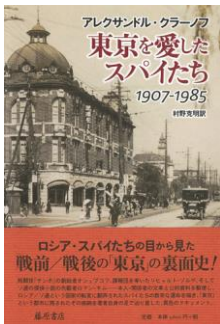
- 『生きる：廉子・宏子文集』（井出廉子、村野宏子著、2020.03非売品）。
- 『生きる：廉子・宏子文集 増訂第2版』（井出廉子、村野宏子著、2021.11非売品）。
- 『大竹博吉、大竹せい 著作・翻訳目録 附・関連文献一覧』（宮本立江氏と共編、同目録刊行委員会、2023.07非売品）。

【著述】

- 「出版ニュース」誌（現在停刊中）、「日本とユーラシア」紙、「名田島お茶の間通信せせらぎ」誌、ブログ「談話室＝水源地」、Web版「水源地」誌への寄稿（翻訳を含む）。
- 「ハルビンの「ナウカ」をめぐる覚書」。——『ナウカ刊行書目一覧』（ナウカ労働組合、2010.01非売品）所収。
- 「大竹博吉 略歴と資料」。——『日露異色の群像 30：文化・相互理解に尽くした人々』（東洋書店、2014.04）所収。

【訳著】

- 『ジャポニズムのロシア』（モロジャコフ著、藤原書店、2011.06）。
- 『富士山に登った外国人 一幕末・明治の旅』（山本秀峰氏と共訳、露蘭堂、2012.12）。
- 「ロシアと日本 一紛争の時代における協力」（モロジャコフ著）（『環』Vol. 52, 2013.01、藤原書店、所収）。
- 『原子力砕氷船レーニン』（ブリノフ著、黒澤昭氏と共訳、成山堂書店、2015.09）。
- 『東京を愛したスパイたち 1907-1985』（クラーノフ著、藤原書店、2017.01）。



現在の寄稿先

- 「せせらぎ」誌
- Web版「水源地」誌
- ブログ（掲示板）：
「談話室＝水源地」